横浜市立
中川西小学校
http:/ /www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/nakagawanishi/
令和６年１月10日発行
１月号

《-- 甲辰 --　今年もよろしくお願いします》

校長　村越直之

新年明けましておめでとうございます。昨年賜りましたご厚情に心より感謝申し上げるとともに、今年もご理解ご協力くださいますようよろしくお願いいたします。

寒の入りを迎え、これから一段と寒さが厳しくなってまいります。冬休みが終わり、大きな病気や事故等の報告はなく、子どもたちは元気に令和６年の学校生活をスタートさせました。

今年の箱根駅伝で青山学院大学陸上部が総合優勝を果たしました。先日、その寮母をしている原美穂さん（原晋監督の奥様）が書いた文章を読みました。その中にマネージャーに関する記述があります。「箱根を走りたい」という思いで入部した陸上部において、何人かは監督から勧められてマネージャーになるそうです。競技人生半ばでマネージャーに転向するわけですから、その選択がかなり大きな決断であることは想像に難くないでしょう。

～～～～以下、本文からの引用～～～～

極端な言い方をすれば、選手は、どれだけ練習がつらくても、自分のために走ってさえいればいい。自分のタイムを１秒でも縮められれば、努力した、頑張ったと認められます。（　中略　）

でもマネージャーは違います。自分のためではなく、選手のために考えて動かなくてはならないし、そうすることが当たり前とされています。自分は絶対に走れない箱根を誰かに走ってもらうため、よかれと思ってやってあげていることも、相手にしてみれば、してもらって当然ということが多々あります。日々、マネージャーから支えられていることを実感できている選手はほとんどいないはずです。（　中略　）

支える側と、支えられる側。マネージャーはその両方を経験するので、目標に向かって努力するつらさも、それを支えるつらさも、走ることで得られる喜びも、誰かを勝たせるという喜びも、立場によっていろいろな感情があることを理解します。だから成長するのでしょう。若くしてこういった経験をした彼らは、きっと社会に出てもしっかり通用するだろうなと思います。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

選手からマネージャーに転向したある学生が「もし選手のときにこの精神状態を手に入れていたら、もっといいタイムが出せたと思います。」と述懐したそうです。

選手とマネージャーという両方の立場で味わった辛さと喜び、つまり主観と客観という両方の見方をもって得られた青春時代の経験は、その後の人生を強くしなやかに生きる術となることでしょう。来年の箱根駅伝では、マネージャーの存在にも注目して応援したいと思います。

本年が皆様にとって幸多き年となりますことを祈念申し上げます。

お正月に、地震による災害、飛行機事故、大きな火事等のニュースが飛び込んできました。情報過多の時代とはいえ、辛く悲しいニュースを立て続けに見聞きしていると、気持ちがざわざわとしてきます。不安な思いをしている子も少なからずいるのではないかと思います。お子さんのことでご心配なことがあれば、いつでもご相談ください。